

まなび通信

- ◆ 最上教育事務所研修通信
第 2 号
- ◆ 令和 2年 5月 21日
- ◆ 最上教育事務所指導課

評価特別号第一弾

「指導と評価の一体化」を目指しましょう！

今年度より小学校で新学習指導要領が全面実施となりました。そこで、本通信でを通して新学習指導要領による評価について、複数回にわたって発信します。

学習評価の基本的な考え方

学習評価 = 学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を把握するもの

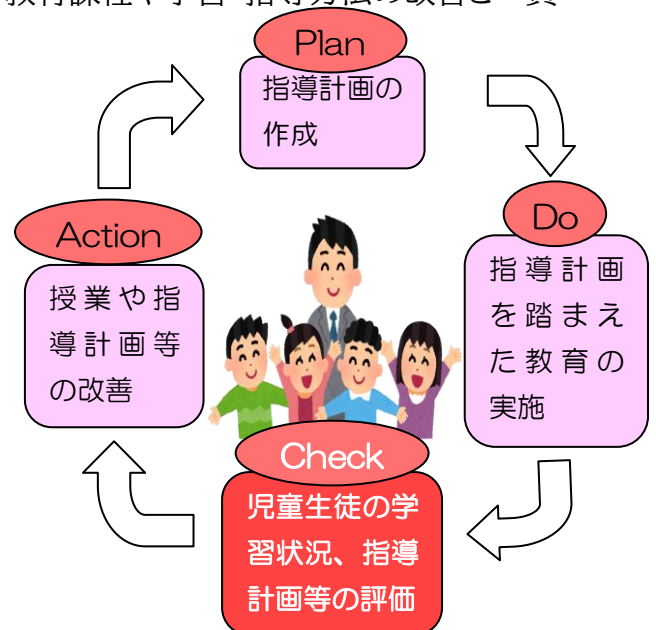
「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、**教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要です。**教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。

「カリキュラム・マネジメント」の一環としての指導と評価

「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹です。教育課程に基づいて組織的・計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と評価

指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価の視点をより一層重視することが求められます。そして、教師自らが指導のねらいに応じて授業の中での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導に生かしていくというサイクルが大切です。各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っています。



学習評価の改善の基本的な方向性

評価を考える際には、右の3つの方向性を必ず踏まえないといけません。学習評価の在り方や基本的な考え方について、学校全体で確認し、学習評価を真に意味のあるものにしていく必要があります。

- 教師の授業改善につながるものにしていくこと
- 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- これまでの慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

各教科における評価の基本構造

目標

学習指導要領に示す目標や内容

知識及び技能

思考力、判断力、
表現力等

学びに向かう力、
人間性等

「目標」と「評価」では、表記が異なります

評価

知識・技能

思考・判断・
表現

①主体的に学習
に取り組む態度

②感性、思いやり
など

・各教科における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況を評価する。
・既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかを評価する。

・各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価する。

・知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、「粘り強い取組を行おうとする側面」と、自ら学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、「自ら学習を調整しながら学ぼうとしているかという意志的な側面」から評価する。

・児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動の中で児童生徒に伝えることが重要。
・特に、「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し児童生徒に伝えることが重要。

【観点別学習状況評価の各観点】

- 観点ごとに評価し、児童生徒の学習状況を分析的に捉えるもの。
- 観点ごとに ABC の 3段階で評価

【評定】

- 観点別学習状況の評価の結果を総括するもの。
- 5段階で評価(小学校は3段階、小学校低学年は行わない)

「学びに向かう力、人間性等」には、

- ①「主体的に学習に取り組む態度」として、観点別評価を通じて見取ることができる部分
- ②観点別評価にはなじまず、個人内評価を通じて見取る部分の2つがあります。

【個人内評価】

- 観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒の一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し児童生徒に伝えることが重要。

(参考) 令和元年度第2回最上地区小学校・中学校教育課程説明会「総論」

「学習指導の在り方ハンドブック(小・中学校編)」国立教育政策研究所